

清水 香 提出 博士学位申請論文

『アイヌ文化における献酒儀礼の考古学的研究

—出土木製品からみる和産物の移入とその影響—』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論は、北海道のアイヌ文化期（中・近世併行期）における「イクパスイ（捧酒箸）」を用いた献酒儀礼の成立について、遺跡出土資料を用いて考古学的に考察したものである。イクパスイ自体の分析に加え、祭祀儀礼具・副葬品・食膳具として重要なアイテムであった和産物の漆器にも注目し、その移入と物流の画期を出土資料から詳細に検討するとともに、絵画および文献史料、民具資料との比較検討も幅広くおこなっている。こうした物質文化の変遷を通して、アイヌ文化の成立過程を総合的に考察する内容となっている。

本論文は、序論、本論、結論の3つの部分から構成されている。

序論として第1章では、本論の目的と研究課題、および論文の構成を説明する。第2章では、アイヌ文化の祭祀・儀礼について文献史料および民族資料にみる「送り儀礼」「献酒儀礼」「民具」を中心に概観し、擦文・オホーツク文化期、およびアイヌ文化期の出土資料と民族事例との対応関係を示す。第3章では、本論の主な研究資料である移入木製品（本州・道南から石狩低地帯へ移入された木製品）について、出土遺跡・器種・樹種の概要を説明する。

論者はアイヌ文化期の出土木製品を、アイヌ民族によって製作され

た「自家製品」と本州からの移入品である「和産物」に分類し、品目を整理している。交流・交易によって入手された和産物には、副葬品、祭祀・儀礼具、あるいは威信財として用いられた漆器類をはじめ、酒や調味料の容器である曲物・結物容器などがあることを示す。そして、自家製品と移入品を識別する属性として、器種や型式とともに材の樹種に着目している。擦文文化期からアイヌ文化期への移行期には、生活様式や物質文化における転換や断絶、変容といった現象がみられるが、そこに本州との文化接触がいかに関与したのかを考察するためには、木製品に用いられた樹種の検討が有効であるとの考えから、独自の方法論を構築している。

以上を踏まえて本論では、献酒儀礼に関する4つの具体的なテーマを設定し、検討を加えている。

第4章ではイクパスイ（捧酒箸）の出土品として10世紀中頃から18世紀前半にわたる出土資料、約300点を集成し、その変遷を整理している。イクパスイを特徴づける線刻・文様については、民具資料との比較検討からその性格を類推している。その上で、石狩低地帯に位置する擦文・アイヌ文化期の遺跡出土資料の樹種を詳細に分析し、文献史料や伝承、民具資料とも比較照合しながら、樹種の選択性を明らかにしている。これらの分析結果を踏まえ、イクパスイと漆塗椀を使用した献酒儀礼が13～14世紀頃には成立していたと論じている。

第5章では、擦文・アイヌ文化期における漆製品の出土資料を集成し、その出現と普及について詳細な検討を加えている。擦文文化期に漆塗りの鞘を持つ刀剣類が現れること、また13世紀後半以降になると

道南の館跡や交易港付近、石狩低地帯のアイヌ墓に漆塗椀が副葬されるようになる事実を確認し、さらに17世紀以降には漆塗椀が副葬品として離島を含め広域的に普及することを明らかにしている。また、漆塗り挽物を対象に樹種の選択性を検討し、東北地方および江戸遺跡の出土資料との比較を通して、揃い椀の欠如や副葬品における東北系箔椀の出土率の高さといったアイヌ文化期の特徴と傾向を論じている。

第6章では、石狩低地帯の擦文・アイヌ文化期の低湿地遺跡から出土した移入木製品（和産物）を集成し、器種と樹種による検討をおこなっている。スギやアスナロなど、石狩低地帯の自然植生にはない樹種が擦文前期から出土するようになり、擦文後期から中世にかけてその比率が急増することを明らかにしている。また、移入漆製品が17世紀以降に広域に普及することを樹種の分析からも裏付けている。

第7章では、1857（安政4）年に書かれた『入北記』を中心に、18・19世紀の文献記録における交易品目を検討している。『入北記』は、函館奉行の蝦夷地調査に同行した^{たまむしさだゆう}玉蟲佐太夫によって、「場所」におけるアイヌの雇用条件や産物の買取価格、和産物のアイヌへの売価などが記された史料である。各場所において当時のアイヌ社会に移入された和産物の品目と価格を検討し、19世紀代には米や酒、煙草といった日常の製品に加え、^{みみだらい つのだらい}蒔絵の漆塗椀や耳盥・角盥といった高価な漆器類が多く、^{みみだらい つのだらい}多くの場所で入手されていたことを明らかにしている。また、ヤムクシナイ（八雲）で「イクハシ」と記載された品目は、伝世品にみられる漆塗のみが施された、和産物としてのイクパスイ（捧酒箸）と推定する。

結論として第8章では、各章での論点を要約したうえで、献酒儀礼の成立とその要因について総合的な考察をおこなっている。献酒儀礼の形式が16世紀末には成立していたことは文献からも分かるが、論者は、^{ゆうふつ あつま}勇払郡厚真町オニキシベ2遺跡1号墓（13世紀頃）に副葬された「蝦夷拵え」の太刀、および鎌倉幕府の管理の下に製作されたと推測される「スタンプ文」の漆器に注目し、近世に盛行する副葬品の組み合わせ（蝦夷刀と漆器）がすでに見られることから、献酒儀礼もまた中世にまで遡及する可能性が高いと論じている。それは交易と物流の視点からみても蓋然性があり、10～11世紀にすでに東北地方北部を主体とする地域からの移入品が確認できること、12世紀には厚真・余市・上ノ国で平泉や鎌倉幕府からの和人の進出を想定させる考古資料が出土していることを指摘する。また、中世アイヌ墓の副葬品に本州および大陸の両方からの移入品があることを示し、アイヌ民族の物質文化が周辺地域との交渉の影響を常に受けながら形成されてきたことを論じている。さらに、擦文前期にイクパスイに類似する製品および漆塗椀の出土例が少数ながら存在することに注目し、10世紀前後のイクパスイ類似資料が確認されているユカンボシC15遺跡、美々8遺跡（現在の千歳市周辺）の事例を根拠に、献酒儀礼の起源が10世紀前後にさらに遡る可能性がある」と結論づけている。

第9章では、今後の展望と課題をまとめている。イクパスイ（捧酒箸）を含め本論で分析資料とした木製品が石狩低地帯の遺跡出土資料に偏っている点に資料上の制約を認め、今後さらに周辺地域を加え、物流・交易の実態をよりマクロな視点で総合的に検討することが必要

であると結んでいる。

論文審査の結果の要旨

イオマンテをはじめとする祭祀儀礼はアイヌ文化の顕著な特徴であり、なかでもイクパスイ（捧酒箸）を用いておこなわれる献酒儀礼は、カムイノミの重要な儀礼形式となっている。本論は、これまで文献史料を中心に研究されてきた献酒儀礼について、出土木製品を資料とした考古学的な分析をおこない、さらに文献史料・絵画・民具による総合的な検討を加えて、その成立過程を追究したものである。木製品の器種や樹種の検討をもとに製品の産地と物流を捉え、アイヌ文化の中に移入された和産物が献酒儀礼の成立と展開に大きく関与していたことを実証的に論じている。

本論では、まずイクパスイ（捧酒箸）と献酒儀礼の成立について検討した。出土資料の集成に基づいて年代的変遷を整理し、蝦夷刀や漆器といった近世アイヌ墓の特徴的な副葬品目が中世（13世紀頃）に遡ることを具体的な出土事例で示し、13・14世紀頃にはイクパスイと献酒儀礼が成立していた可能性がある」と論じた。また、木製品の線刻・文様の分析、および民具との比較検討もおこない、これらが現在に残る刻印（祖印・所有印）の観念や文様自体の意味と共に継承されてきた可能性を指摘した。さらに、出土木製品の樹種組成を検討し、出土考古資料と伝承にみえる樹種が高い確率で一致する一方で、伝承とは

明らかに異なるイクパスイが存在することを明らかにした。その要因として、酒の容器であった桶・樽の部材をイクパスイに加工する選択性があったとの見解を提示した。

次いで、和産品である漆器の種類と移入状況を検討した。漆器・漆製品の出土例と出土状況を通時的に検討し、擦文文化期では太刀の鞘が主であり、13世紀後半以降になると道南の館跡や交易港付近、石狩低地帯のアイヌ墓に刀剣類と漆塗椀の副葬例が出現する事実を明らかにした。さらに17世紀以降になると、北海道全域のアイヌ墓で漆塗椀が確認される事実から、近世以降、和産物の漆器類が急速に普及したことを論じている。また、漆塗椀の樹種組成を検討し、近世ではブナ属・トチノキ・ケヤキ属など東北・北陸地方と同様の樹種が卓越する事実を捉え、出土品の主体を占めるブナ属製品について、東北地方からの移入品と推定した。また、日常で使用するイタンキ（椀）と献酒儀礼におけるトゥキ（椀）の選択基準を検討した結果、集落跡から出土する一般的な椀に対して、墓からの出土品には蒔絵や箔絵が施される資料の比率が高い点が明らかとなり、装飾的な椀を副葬品として選択した可能性が高いと考察する。

さらに、和産物の移入の年代的変遷を検討した。石狩低地帯の遺跡群から出土した木製品の網羅的な検討に基づき、擦文期に樹種組成が大きく変化し、とくに擦文後期後半に移入品の増加が顕著になる事実を突き止めた。木製品に占める移入樹種の割合は、中世から近世アイヌ文化期にかけてさらに増大し、祭祀・儀礼や生業に関連する道具の製作に広く用いられている状況を明確にした。また、移入材の増加に

伴って、再加工品の種別や数量が増えることも指摘する。石狩低地帯の遺跡出土資料に多く含まれるアスナロ属やスギを使用した木製品については、これらの樹種が卓越する道南や青森県ないし秋田県地方から搬入された可能性が高いと推察する。

以上の検討に加え、安政4年成立の『入北記』を中心に、史料に記録された交易品目を検討している。場所請負制の下でアイヌが労働力の対価として入手したものには、米や酒といった日用品のほかに、高額な漆器類があること、アイヌが製作した「細工物」が買い取り品目として記されている事実を確認した。高額な漆器類は、アイヌが祭り（送り）の道具として、さらに副葬品や威信財として希求した品目であり、アイヌの労働力を確保しようとする和人側の目的とも合致して、漆器を対象とした和人とアイヌの交易が成り立っていた構造をあらためて実証している。

以上の考察から論者は、イクパスイ（捧酒箸）と漆塗椀を使用した献酒儀礼の成立について独自の結論を導いている。13・14世紀代には、厚真・余市など物流・交易の拠点となる地域で、蝦夷刀や漆器を中心とするアイヌ墓の副葬品のセットが見られるようになることから、献酒儀礼もこの頃には成立していた可能性が高いと論じる。さらには千歳市ユカンボシC15遺跡・美々8遺跡の出土事例からは10世紀前後まで遡及する可能性がある」と指摘する。

アイヌ文化の成立については、これまでクマ祭りとオホーツク文化との関連に注目が集まり、その面からの論考が研究史の主流をなしていた。しかし論者は、和産物の移入がアイヌの物質文化と祭祀儀礼の

形成に深く関わったという視点を持ち、擦文文化からアイヌ文化への変遷過程に焦点を当てている。中世末から近世の献酒儀礼においても、自家製品のイクパスイと移入品の酒および漆塗碗が用いられていることを、出土考古資料の分析と文献・伝承・民具の総合的検討から実証する。

アイヌの物質文化が本州和人をはじめ周辺地域との交渉関係の中でその影響を受けつつ形成されてきた面を重視するのであれば、「アイヌ民族」「アイヌ文化」もまた歴史的な形成過程を問題としなければならない。あたかもそれを自明視するような本論の記述は、歴史的用語と概念整理に熟慮を欠いているとの批判を受けよう。また、主に石狩低地帯の出土資料に基づく本研究は、いわば一つの地域集団の様相を明らかにしたに過ぎず、道北・道東のオホーツク文化との関係などを含め、さらに広域的な視点での検討が望まれる。

そうした点に課題が残るものの、アイヌ文化の神髄とも言うべき祭祀・儀礼の形成を、本州和人文化との関係や木製品・漆製品の物流・移入という独自の研究視点を軸に考察しようとした意欲的研究である。考古資料・民具・文献・絵画など、関連する資料と研究の知見を幅広く参照している点も優れている。出土木製品の網羅的な検討によって、献酒儀礼に関連する物質文化の成立過程を実証的に究明した研究はこれまでになく、アイヌ文化の歴史研究に新鮮な視点を提起するその学術的意義は高く評価される。

よって、申請者清水香は博士（歴史学）の学位を授与せられる資格があるものと認められる。

平成29年2月15日

| | | | |
|----|-----------|------|---|
| 主査 | 國學院大學教授 | 谷口康浩 | ㊟ |
| 副査 | 國學院大學名譽教授 | 小林達雄 | ㊟ |
| 副査 | 首都大学東京教授 | 山田昌久 | ㊟ |

清水 香 学力確認の結果の要旨

下記3名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、
博士（歴史学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成28年12月22日

学力確認担当者

| | | | |
|----|-----------|------|---|
| 主査 | 國學院大學教授 | 谷口康浩 | Ⓔ |
| 副査 | 國學院大學名誉教授 | 小林達雄 | Ⓔ |
| 副査 | 首都大学東京教授 | 山田昌久 | Ⓔ |